

家族を殺され

犯罪被害者遺族」といっ

人生

第1回 上智大生放火殺人事件

「遺族らしさ」の無言の圧力



26年後も訴え続ける父親



「お母さんっ子」だった順子さん

今年の命日も、26年前のあの日と思わせる雨だった。次女の小林順子さん(21)が当時を殺害された父、賢二さん(76)は、東京都葛飾区柴又の事件現場で記者会見を開き、沈痛な面持ちでこう訴えた。

「早いもので事件から26年の歳月が流れました。愛する娘、順子は、夢にまで見た海外留学を目前に、突然命を絶たれ、希望を絶たれました。この地から世界に羽ばたこうとしていた一人の若者の、尊い命と夢と希望を、無惨にも奪っていった犯人を、私は絶対に許すことはできません」

1996年9月9日夕暮れ前、都内は雨が降っていた。賢二さんの自宅が何者かに放火され、焼け跡から順子さんの刺殺体が見つかった。順子さんは当時、上智大学の4年生で、2日後に米シアトル大学へ留学する予定だった。犯人は未だに逮捕されておらず、賢二さんは「なぜうちの娘が、なぜ我が家が」と問い続ける。

26年間を過ごした。「私たち遺族が最も恐れているのが、事件の風化でございませ……」

黒いネクタイにスーツ姿の賢二さんの声が、柴又の住宅街に響き渡った。集まった報道陣は約30人。今こそ、こうしてメディアの前に堂々と顔を出している賢二さんだが、実は取材を受けるようになったのは、事件発生から3年が経ってからだ。その後も10年近くは顔を合せなかった。理由をこう打ち明ける。

「やっぱり顔を知られたくなかったですね。奇異の目で見られたくないというか。周りはそう思っていないかもしれないけど、痛くない腹を探られるのが嫌だった。心の片隅に、ごくごく普通

に生活したいという気持ちもあるわけですよ。でも事件は絶対に忘れちゃいけない。そこに自分の葛藤がありました」

普通に生活したい……。周囲の目を気にすることなく、事件前と同じように街を歩いたり、笑ったり、時には酒を飲みたい。そんな事件遺族のささやかな望みは、「悲しみに暮れているであろう人たち」というイメージの前に阻まれてしまう、あるいは本音を口にできない。だが、彼らは遺族である前に、喜怒哀楽を持ったひとりの人間ではないだろうか。そんな問いをテーマに、事件や事故の遺族取材を重ねていくと、世間が抱く「遺族像」とは異なる素顔が、浮かび上がってくる。

「私たちは同情し、涙して知った気になる。犯罪被害者遺族の苦しみを。だが知らない。「遺族という枠」に押し込めることで、時に泣き、そして時に笑う生身の彼らの姿を知ろうとしない」。否応なく続く「遺族の日常」に迫る連載。第1回は上智大生放火殺人事件。

のだった」。今では「被害者の父親」として前面に立つ賢二さんだが、実は順子さんは根っからの「お母さんっ子」で、賢二さんは「煙たがられていた」と明かす。被害者の家族関係はしばしば「美化」されがちだが、次のようなやり取りこそ、年頃の娘を持つ父親のリアルを表しているように思われる。

ある晩、午後11時過ぎに小林家に電話が掛かってきた。そうは言っても親と子である。順子さんはたまに、自宅最寄り駅である柴又までの終電に間に合わない時間帯に帰って来た。夜道をひとりで歩かせるわけにはいかないし、賢二さんはパジャマから着替え、自転車道を漕いで京成高砂駅まで迎えに行った。

「僕は大学を出ていないから、キャンパスライフというものが憧れがありました。だから自分の娘には門限を

た。たまたま電話に出たのが賢二さんで、相手の声は事件前に順子さんが交際していた彼氏だった。「娘は入浴中だから電話に出られない。もう11時回ってるよ」

そう言うって電話を切った。これに怒った順子さんは、賢二さんには二度と電話に出させないようにしたという。携帯電話がまだそれほど普及していない時代の、微笑ましいエピソードだ。

幸子さん(76)は、憔悴し切っていた。あの日幸子さんは、都内の美容院で着付けの仕事をしていて。午後5時前、近くの病院で働いていた長女、亜希子さん(51)から電話が掛かってきた。

「お母さん、家が火事になったと聞いたんだけど、順子は家にいるよねえ？」

慌てて電車で帰ると、自宅の前には消防車が何台も停まり、家は焼け焦げている。駆けつけた友人たちと一緒にしばらく隣家に待機し、後に亀有警察署へ向かった。そこで出張先の福島から帰ってきた賢二さんと落ち合い、事実を告げられる。咄嗟にこう泣き叫ぶ。

「順子がいなくて生きていけない」

家族3人は別々に事情聴取を受けた後、深夜になって同署の遺体安置室で、棺に入った順子さんと対面する。幸子さんだけは立ち会える状態ではなかった。賢二さんが回想する。

家族を保つ

1975年生まれ。上智大学外国語学部卒業。2011年、『日本を捨てた男たち』で第9回開高健ノンフィクション賞を受賞。10年超のフィリピン滞在歴をもとに「アジアと日本人」について、また事件を含めた世相についても幅広く取材。今年3月から5月上旬まではウクライナに滞在し、戦地の現実をルポした。

「棺の中に入っているのは、順子であってほしくない」と、事件を否定したかった。でも残念ながら、棺の中に眠っていたのは順子でした。安らかな死に顔だった。それは遺族の心を和ませてくれました」

一方の亜希子さんには、妹の顔が違って見えた。「とても無念そうな顔をしていました。薄目を開けている感じで、それがすごく悲しそうだったんです。真正面を向いているのではなく、斜め左を見ているとい

ても活字が全く頭に入らない。展覧会に出展するほど打ち込んだ油絵も、筆が持てなくなった。割り勘の計算も覚束ない……。一つ一つ、できないことがまた増えていく。

焼けた自宅は事件から1年3カ月後、更地になった。夏には草むしりが欠かせないが、賢二さんといつも一緒にに行った。

「みんなが朝起きて動き始める前、午前5時ごろに自転車に乗って向かいました。やっぱりに人に会いたくなかったから」

賢二さんは事件前、高砂駅前にあるスナックに通い、「自慢の喉」を聞かせていた。だが、事件後は一切、足を運んでいない。

「そこで酒を飲みながら歌っている姿を、馴染みの常連客に見られなくなかったからです。娘がああいう目に遭ったのに、のうのうとカラオケを歌える気分か？被害者である娘のことを忘れてるんじゃないか？そう思われるかもしれない



事件現場に建てられた「順子地蔵」

うか。あの顔は忘れられないです」

署から解放された3人は夜更けにもかかわらず、自宅が焼けたので帰る場所がなかった。幸子さんが所属しているママさんバレーの友人の好意で、1週間、その友人宅で世話になった。

幸子さんは数日間、身動きできず点滴が必要な状態で、友人たちが交代で面倒を見てくれた。葬儀が終わり、近くに借りたアパートへ移った。8畳間の部屋には、順子さんの骨壺と遺影が置かれた祭壇があった。幸子さんは毎朝、布団から出ると祭壇の前に正座し、骨壺を膝の上に抱えてじっとしていた。

「ある時、目を覚ました主人が私を見てびっくりしていました。何も声は掛けてきませんでしたが」

そんな母の後ろ姿を見ていた亜希子さんからは、病院でカウンセリングを受けよう勧められた。

「そんなことやっても順子は戻ってこない」

姉の結婚式

事件から半年後の翌年3月には、都内のホテルで亜希子さんの結婚式が控えていた。賢二さんが当時を述懐する。

「2人の関係よりも、結婚は家族対家族だから、相手の方から破談にされるかもしれないと思いましたが、だって妹があれだけの殺され

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「ある時、目を覚ました主人が私を見てびっくりしていました。何も声は掛けてきませんでしたが」

そんな母の後ろ姿を見ていた亜希子さんからは、病院でカウンセリングを受けよう勧められた。

「そんなことやっても順子は戻ってこない」

一度は断ったが、ママさんバレーの友人に付き添われ、しばらく病院へ通った。幸子さんは、家では決して口にできない思いを、カウンセラーに吐き出した。

「私と同じ思いでいる主人と娘に順子のことを話すと、2人とも悲しくなっちゃうから言えない。だから普通に生活をするようにしていたら、友人が『小林さんは強い人だね』って。強くないです。ホントはいくらでも挫けちゃうんだけど、もうしてないと家族が保てないんです」

事件から3カ月後、幸子さんは体重が10キロ近く落ちていた。心にトラウマを抱えたまま、それでも事件後の人生は続いていく。

「歌うのを止めました」

「2人の関係よりも、結婚は家族対家族だから、相手の方から破談にされるかもしれないと思いましたが、だって妹があれだけの殺され

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「ある時、目を覚ました主人が私を見てびっくりしていました。何も声は掛けてきませんでしたが」

そんな母の後ろ姿を見ていた亜希子さんからは、病院でカウンセリングを受けよう勧められた。

「そんなことやっても順子は戻ってこない」

一度は断ったが、ママさんバレーの友人に付き添われ、しばらく病院へ通った。幸子さんは、家では決して口にできない思いを、カウンセラーに吐き出した。

「私と同じ思いでいる主人と娘に順子のことを話すと、2人とも悲しくなっちゃうから言えない。だから普通に生活をするようにしていたら、友人が『小林さんは強い人だね』って。強くないです。ホントはいくらでも挫けちゃうんだけど、もうしてないと家族が保てないんです」

事件から3カ月後、幸子さんは体重が10キロ近く落ちていた。心にトラウマを抱えたまま、それでも事件後の人生は続いていく。

「2人の関係よりも、結婚は家族対家族だから、相手の方から破談にされるかもしれないと思いましたが、だって妹があれだけの殺され

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「遺族らしさ」という無言の圧力。事件から時が経てば、以前のように笑ったり歌ったりもするだろう。それは本来、被害者や事件を忘れていくことにはならないはずだ。だが、世間はそう受け取ってくれないのではないか。そんな懸念が、賢二さんの脳裏には、呪縛のごとくこびりついていた。

「ある時、目を覚ました主人が私を見てびっくりしていました。何も声は掛けてきませんでしたが」

そんな母の後ろ姿を見ていた亜希子さんからは、病院でカウンセリングを受けよう勧められた。

「そんなことやっても順子は戻ってこない」

一度は断ったが、ママさんバレーの友人に付き添われ、しばらく病院へ通った。幸子さんは、家では決して口にできない思いを、カウンセラーに吐き出した。

「私と同じ思いでいる主人と娘に順子のことを話すと、2人とも悲しくなっちゃうから言えない。だから普通に生活をするようにしていたら、友人が『小林さんは強い人だね』って。強くないです。ホントはいくらでも挫けちゃうんだけど、もうしてないと家族が保てないんです」

事件から3カ月後、幸子さんは体重が10キロ近く落ちていた。心にトラウマを抱えたまま、それでも事件後の人生は続いていく。

味と心の贈りもの 浅草今半 創業明治三十八年 東京都台東区浅草二丁目一七〇番 浅草今半 浅草今半 浅草今半

「心配だったのよ」の一言でもあれば、ありがたございませう」で済んだのに、あからさまに目を逸らされました。考えてみれば、相手も何と声を掛けていいのかわからないですよね。でもそういうふうにはされず、すごく人間不信に陥ってしまいます」

「心配だったのよ」の一言でもあれば、ありがたございませう」で済んだのに、あからさまに目を逸らされました。考えてみれば、相手も何と声を掛けていいのかわからないですよね。でもそういうふうにはされず、すごく人間不信に陥ってしまいます」

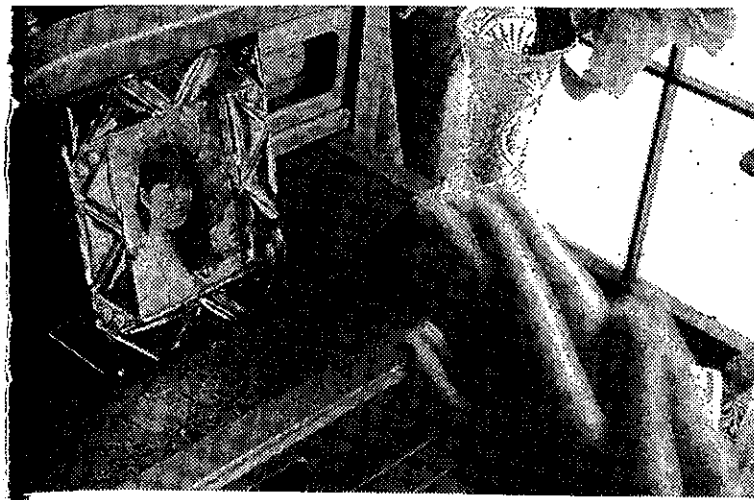
「心配だったのよ」の一言でもあれば、ありがたございませう」で済んだのに、あからさまに目を逸らされました。考えてみれば、相手も何と声を掛けていいのかわからないですよね。でもそういうふうにはされず、すごく人間不信に陥ってしまいます」

「心配だったのよ」の一言でもあれば、ありがたございませう」で済んだのに、あからさまに目を逸らされました。考えてみれば、相手も何と声を掛けていいのかわからないですよね。でもそういうふうにはされず、すごく人間不信に陥ってしまいます」

「心配だったのよ」の一言でもあれば、ありがたございませう」で済んだのに、あからさまに目を逸らされました。考えてみれば、相手も何と声を掛けていいのかわからないですよね。でもそういうふうにはされず、すごく人間不信に陥ってしまいます」

「心配だったのよ」の一言でもあれば、ありがたございませう」で済んだのに、あからさまに目を逸らされました。考えてみれば、相手も何と声を掛けていいのかわからないですよね。でもそういうふうにはされず、すごく人間不信に陥ってしまいます」

「心配だったのよ」の一言でもあれば、ありがたございませう」で済んだのに、あからさまに目を逸らされました。考えてみれば、相手も何と声を掛けていいのかわからないですよね。でもそういうふうにはされず、すごく人間不信に陥ってしまいます」



「ええ？」と思いました。こつちも大変なのに……。でも相手のお母さんだから「わかりました」という感じで電話を切らざるを得なかった。これで結婚の話も無くなるのかなと、少し不安がよぎりました」

婚約者はその後岡山に戻り、直接連絡が取れるようになって2人の関係は事なきを得たが、結婚式という晴れ舞台はキャンセルされた。賢二さんが語る。

「一番大きな披露宴会場を押さえていましたが、とて

もじゃないけどそんな派手なことではできない。とはいえ、娘も彼と生活を始めるのを夢見ていただろうし、あの事件がその障害になっではいけない。幸せを求めて旅立っていく娘を、親に止める権利はありません」。

3月、亜希子さんは、賢二さん、幸子さん、事件の担当刑事に見送られ、一人で東京駅を旅立った。その後ろ姿が、賢二さんの目には一層、寂しく映るのだった。

院生で、長女は今年2月から、米国サンディエゴへ留学中だ。成田空港を発する時には、順子さんが使っていた英語の辞書を賢二さんから手渡された。

式が行われるはずだった

「結納品も思い出の写真も灰と化し、本当に可哀想なことをしました」

26年後の真実

亜希子さんが岡山に渡っておよそ1年後、長男が生まれた。

さんは、長男が10歳の頃、仏壇に飾ってある遺影の妹は「誰かに殺されたんだよ」と子供たちに聞かせた。

「主人とも孫は早く作ってあげたほうがいいねという話はしていました。生まれたら母はすごく喜んでくれました」

「テレビで年に1回は妹のことが報道されるじゃないですか。だから子供たちは、家で見ている妹の顔がどうして映っているんだらうとは思っていたようなんです。いつまでも隠すわけにはいかないの伝えると、それほど驚いた様子ではありませんでした。法事にも毎年連れて行ったので、「だから仏壇に写真があるのね」という反応でしたね」

その2年後には、長女も生まれた。幸子さんにとって、孫の存在は生きがいのあった。その頃から美容院の仕事にも復帰し始め、事件発生から数年後にはようやく、笑顔を取り戻した。

子供たちは2人も大学に進学し、長男は現在大学

遺族に新しい命が誕生すると、いつかは真実を伝えなければならぬ時が来る。現在は岐阜県在住の亜希子

なぜ、電話を代わってくれなかったのか。

「知らないです」

「どうして具合が悪くなったのかも含めて、主人は今までの当時のことを詳しく教えてくれていないんです。結婚後も夫婦の会話でその話が出たことはありません。でも……」

取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。

「知りたかったですね」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」

「実家で休んでいたのは、やはり事件のショックから仕事で生死に向き合うこと

「取材が終わった後、亜希子さんは夫に聞いてくれたようで、翌日に次のような内容のメールが届いた。」